

# 尻屋磯根資源調査 (要約)

桐原 慎二・山内 弘子・藤川 義一\*

## 目 的

尻屋沿岸の磯根資源の状況を把握し、地先漁場の管理に資する。

## 方 法

2002年6月11日に、太平洋に面する尻屋沿岸に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計74地点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方の枠で2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。底棲動物のうち、エゾアワビについては殻長を測定した。6つの調査線から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計127個体については、生殖腺重量を量り、身入りを求めた。

## 結 果

2年目マコブは、水深10mでは8本/㎡と多く、5m以浅では4本/㎡以上の密度で生育した。全調査地点の平均では4.1本/㎡となっており、前年の1.8本/㎡に比べ2倍以上の値を示した。なお、水深20mにおいても0.5本/㎡の生育が認められたが、この水深に2年目マコブが認められたのは、1992年以来10年ぶりであった。生育下限が広がったことから、昨年は、マコブの発生にとって比較的好適な環境下にあったと言える。

1年目マコブは、水深5m以浅では40-50本/㎡と多いものの、10-15mでは12.3本/㎡に減少し、20mでは採取されなかった。このため、全調査地点の平均では23.5本/㎡となっており、前年の47本/㎡に比べ約半分の密度に留まった。1年目マコブは、岸島、ミサゴ島、廻り崎地先を主体とする計19地点、全調査地点の25.6%から採取されたが、これは、74.3%に相当する55地点に生育していた前年の結果に比べ、生育地点が約3分の1に限られた。生育地点数と密度の比較からは、来年度の2年目マコブの漁獲は、本年に比べ減少する可能性が懸念された。

アワビ(エゾアワビ)は、全体の約3分の1に相当する24地点から58個体が採取された。このうち、全体の67.2%に相当する39個体が殻長9cm以上あって漁獲対象にまで成長していた。ことに、殻長10cm台の貝が16個体あって全体の27.6%を占めており、漁獲による積極的な活用が考えられた。また、これまで尻屋で報告された年齢と成長式からは、3歳とみなされる殻長6cm前後の未成貝が10個体前後認められたほか、1歳とみなされる稚貝が採取され、天然での再生産が行われているものと考えられた。アワビは、おおむね全沿岸に認められ、その生息密度は、水深10-15mで0.57個体/㎡と高く、全調査地点の平均では0.36個体/㎡あって、前年の0.23個体/㎡に比べ約1.5倍の密度を示した。

キタムラサキウニは、全域にみとめられ、全調査地点の93.2%に相当する69地点から採取された。いづ

\* 下北地方農林水産事務所むつ水産事務所普及課

発表誌：平成14年度尻屋磯根資源調査報告書、青森県水産増殖センター、平成14年6月。

れの水深とも2.6個体/㎡以上と高密度に生息しており、全調査地点の平均では3.0個体/㎡、444.7g/㎡となった。この値は、前年の302g/㎡、前々年の448.5g/㎡と同様な水準にあって、尻屋沿岸は、近年、キタムラサキウニが高密度に生息する状態が続いていると言えた。その身入り（生殖腺指数）は、水深20mでは14.3%、15mでは18.7%と深所では低下するが、10m以浅では20%以上あって高い値を示した。

これまで、1月第5半旬の水温からその年の1年目マコンブの生育密度を、3月第3半旬の水温から翌年の2年目マコンブの生育密度を予測できる可能性を示してきた。そこで、本調査結果について、当該予測を検証した結果、1年マコンブで誤差15%、2年目マコンブでは0.25%となった。従って、本年に限っては、予測値と実測値が良く一致したと言えた。